

とらべつ

歴史余話

第26回 庭の植物の移り変わり

北海道医療大学

薬用植物園担当

大沼

弘樹

1990年代、全国的に巻き起こったガーデニングブームをきっかけに、世界中から集められた多種多様な草花が庭を彩るようになりました。当別町においても、個人宅の庭や道路脇の植え込み、学校や社寺の庭園などで、数えきれないほど多くの園芸植物を見ることができます。またホームセンターの店頭では、毎年のように新しい草花がお目見えし、その変化は目まぐるしいほどです。

ガーデニングという言葉が広まるよりもずっと昔から、思い思いの草花を育てて楽しむ「庭いじり」は広く親しまれてきました。商業的に語られがちなガーデニングよりも、庭いじりという言葉の方が、暮らしに根差した魅力が感じられるようにも思います。このような言葉の変遷と共に、植物の品種そのものも流行り廃りの波に見舞われてきました。ここでは身近な例として、春に咲くスイセンと、夏に咲くユリを紹介しましょう。

スイセンの仲間は当別の気候によく馴染み、丈夫な品種が多くあります。それゆえ民家跡の荒地や道端でも、何十年も生き続けることがあり、町内各地で見かけます。ところが、今も店頭には多様なスイセンが売られているにもかかわらず、昔ながらの花とまったく同じ品種を見つけることは容易ではありません。新たに買おうと思っても、品種名すら忘れ去られている場合が多いのです。

ユリの仲間も庭先や街路の植え込みに、いつ誰が植えたかもわからない古株が咲いているのを見かけますが、これらも市場からほぼ姿を消した

「ビンテージ品」の場合があります。一概には言えませんが、近年登場した品種のユリは、切り花や鉢花として扱いやすいように、上を向いて咲く品種が好まれるようです。一方、オニユリのような野生もしくはそれに近い種類や、比較的古い栽培品種には、うつむいて咲くものが多い傾向にあります。

このように庭や街路の植え込みは、地域の園芸の歴史が詰まったタイムカプセルでもあります。しかしながら、人為によって作られた栽培植物は大衆文化として根差してきたものの、資料に乏しく、野生植物に比べると、積極的な保全がされにくい面があります。流行が終わっても道端に残るものの、その存在すら知られず、人知れず消えていったり、これから消えてしまったりする栽培品種も少なくないと思われます。

華々しく、そして目まぐるしく草木が変わる現代のガーデンも美しいのですが、人々の歴史や思い出が根付いた庭や、そこに古くから生きる植物は、お金では手に入らない文化遺産と言えるでしょう。



路傍に咲く品種名不詳のスイセン属(東裏) 昔ながらのオニユリ

第40回

あそ雪の広場

◎あそ公園 当別町元町阿蘇公園

開会式

2.11 土

2.12 日

閉会式

花火大会

13:00-17:30

9:00-13:00

イベント内容等の情報は、折込チラシ、SNSでお知らせ致します!

花火大会は、悪天候の場合は12日に延期となります。



観光協会HP



facebook



instagram

主催 あそ雪の広場実行委員会 (0133-23-3129)
(当別町産業振興課内)



広 告